

前を向いて腹を満たせ

石川
ナオ

【人物表】

- さかまき かわはら ゆい
酒巻 (旧姓河原) 唯依 (7、28、29) アパレル会社員
- さしむら
酒巻 悟 (20、26、27) 出版社社員、唯依の夫
- なるせ
成瀬瞳 (31、32、35、36) 外資系会社員
- たいが
成瀬大雅 (31、33、36、37) スタイリスト、瞳の夫
- あきえ
河原昭江 (43、64、65) 専業主婦、唯依の実母
- まなべゆう
真鍋悠(29) モデル、大雅の彼氏
- あまら
佐藤 哲 (37) 瞳の同僚、トランスジェンダー女性
- ひがしのみつこ
東野充子 (58) 隣人
- けんぞう
河原堅三 (70) 唯依の祖父、昭江の舅
- 河原みつ (67) 唯依の祖母、昭江の姑
- あつし
成瀬篤志 (65) 大雅の父
- 成瀬亜由子 (58) 大雅の母
- 淡路 (29) 唯依の元彼氏
- 圭子 (45) 唯依の会社のスタイリスト
- 内藤 (43) 悟の同僚
- 川本 (20) 悟の大学の同級生
- 後藤 (55) 瞳の前職の人事部長
- こひぎ
伊月 (32) 瞳の友人
- つばさ
翼 (6) 瞳の知人の子供、小学生男子。
- 沢倉 (36) ヘアメイク、大雅のゲイ友
- 雨宮 (29) 大雅の昔の彼氏
- 女医
- 女性社員A、B 瞳の同僚
- 男性社員A、B 瞳の同僚

○アパート・唯依の部屋（夜）

ベッドの上、河原唯依（28）と淡路（29）が裸で横たわっている。

枕元に開封済みコンドームの箱。

淡路「（戸惑い）そんなに嫌だったの？」

唯依「セックスが嫌、あなたのことが嫌なわけじゃない」

淡路「プラトニックな関係でも大丈夫だよ？」

唯依「耐えられるの？」

言葉を失う淡路、ベッドを出て部屋から去っていく。ぼんやり天井を見ている唯依、大きく息を吐く。

○遠野婦人科医院・診察室

診察中の唯依。女医がカルテを見ている。カルテの初診日は六年前。

唯依「そろそろ諦め時かなと思いました」

女医「まだ早発閉経と決まったわけじゃないですよ？　今は他にも色々な方法が」

唯依「いえ、行為が出来ないのも体が無理す

るなって言っている気がして。生理来なくて楽だくらいに、思うことにします」

吹っ切れた顔の唯依。

○アパート・唯依の部屋（朝）

スピーカーで昭江と電話をしている、スーツ姿の唯依。テーブルの上に「アライブ創立パーテイ要項」の書類。

昭江の声「また彼氏と別れたの？　もう三十前なのに。いつになったら孫の顔が見られるのよー？」

身なりを整えている唯依の手が止まる。うんざり顔が姿見に映る。

唯依「仕事あるから切るね。じゃあ」

昭江の声「ちよっと、唯依！」

唯依の手、スマホの通話を切り、溜息。鞆に荷物を詰めながら、中身が沢山残る開封済みコンドームを見つける。

唯依「もう、いらないか」

唯依、コンドームをゴミ箱に捨てる。

○ホテルの宴会場（夕）

ステージに「アライブ株式会社創立40周年」の看板。

ビール瓶を持って立っている唯依、男性たちの取り巻きにビールを注ぐ。

取り巻きの中に酒巻悟（26）もいる。

作り笑いを見せている唯依。

× × ×

フロアの隅に立つ唯依、近くのテーブルにビールの空き瓶を置いて溜息。

その横に同じくビールの空き瓶を持ってやってくる悟、同じく溜息。

唯依と悟、目を見合わせ、苦い顔で会釈。

○BARレスト・店内（夜）

カウンター席後ろのテーブル席。

唯依はショットカクテル、悟はビール。

唯依「お疲れ様でしたー」

悟「お疲れ様です。懇親会疲れましたね」

唯依「本当に。若手や女社員はお酌係で、ビール注いでばかり。いつの時代？」

悟「弊社も同じような感じですよ」

唯依「二次会は抜けられて良かったです、すみません付き合っていただいて。飲みたいもの飲みましょう」

唯依、笑う。

× × ×

唯依はウオツカライム、悟はビール。

唯依「オッサン連中は口を開けば結婚は？

恋人は？ セクハラだって散々言われてるのに、全然変わらない」

悟「男も同じような感じですよ。そういうのは女の子にだけ言っちゃダメって思われてる。

男にはセクハラとすら思われない」

唯依、頷きながら酒を飲む。

唯依「会社でも家でも結婚の話ばかり」

悟「家族を作るって大変なことなのに、結婚って話ばかりが先走ってて」

唯依「わかります。どうせ結婚したって私に

は家族なんて作れないのに」

悟「そんなことは……え、いや、色々事情ありますよね」

唯依「……酒卷さん、そういうの理解ある人ですか」

悟「え、いや、僕も多分家族が作れない部類で、なんというか……」

首を傾げる唯依、聞きたそうな顔。

悟「ここでは話しづらいです、いや、女性の前では話せないです」

唯依「私、そういう男だとか女だとか、気にしない方です。ご遠慮なく」

悟「えっと……」

唯依「場所、変えましようか？」

カウンター席に成瀬瞳（35）と成瀬大雅（36）が座っている。唯依たちにちらりと目を向ける。
立ち上がる唯依。

○ラブホテル・前（夜）

悟、腕を引く唯依に抵抗。

悟「いや、僕そういうつもりじゃないんで！」

唯依「はい、私もそういうつもりじゃないです、でも場所が他に思いつきませんでした」

悟「発想がおかしい」

唯依、悟の腕を引き中に入っていく。

○同・客室（夜）

ベッドの上で正座し、向き合っている

唯依と悟。

唯依「さあ、ご遠慮なくどうぞ」

悟「まあ、そういう展開になっても僕は出来ないんですけど。勃たないので」

唯依「た、たたない？」

唯依、ベッドの上で立ち上がる。

悟「そうじゃなく！ここで必要な方です。

なのでお断りするしかなく……？」

唯依「あ、ああ……！」

座る唯依、嬉しそうな顔で悟を見る。

悟「その反応は、どういう……？」

唯依「すみません、仲間を見つけて万歳した
いけれどやめておいた方がいいと思って、
でも感情を抑えきれなかった顔です」

悟「え？」

唯依「私も、セックス出来ないんです、不感
症というやつで……」

悟「え、それは言及していいんでしょうか？」

唯依「いいです、寧ろ聞いてください、話せ
る人が身近に誰もいなかったから」

唯依、前のめりになる。

× × ×

ベッドに三角座りしている唯依と悟。

唯依「そんなこんなでついに十人目の彼氏と
お別れして。結局無理してもお互いの為
にはならないってわかったので」

ちよつと涙目の唯依、悟が近くのティ
ッシュを取って渡す。

悟「うん、わかります、……とても」

唯依「わかってくれたー」

笑い合う唯依と悟。

○（回想）大学・教室

悟（20）と川本（20）他数名の男子学生が猥談で談笑している。

悟の声「僕もね、前から女の人に興奮するこ
とがないなと思ってて」

川本「なあ、酒巻の抜きネタは何？」

悟「実はなくって……」

川本「ないの……無で出来んの……」

悟「いや、したことが、ない」

絶句する川本たち。

○元のラブホテル・客室（夜）

三角座りでしょうんぼりしている悟。

悟「病院で診て貰って症状がわかったけど。

友達から変に気を遣われるようになって」

唯依「……うん」

悟「それだけで自分が出来損ないの人間みた
い思えちゃいますね。普通に生きてるのに」

唯依立ち上がって、冷蔵庫から二人分
の缶ビールとつまみを持ってくる。

悟「彼女が出来たこともあったけど、エッチ出来ないからって結局振られて」

唯依「そう、やっぱり体の関係って大事なんですよねえ……」

テレビをつける唯依、A Vが流れる。

唯依「私もこんなふうにはセックスしてみたかったけど……」

缶ビールを飲みながら、平然とA Vを見る唯依と悟。

唯依「無理なものは無理、もう別のことにエネルギーを使う方がいいって思いました」

悟、じっと唯依を見る。

唯依「人間の欲求は二つでも充分だって。諦めたら凄く楽です」

唯依、つまみを食べ、酒を飲む。

唯依「少なくともちゃんとご飯食べていられたら、元気に生きていきます」

悟、尊敬の眼差しで唯依を見る。

悟「諦めるっていうより、前向きでいいと思います。何も悪いことじゃない、かつこい

いと思います」

唯依「そっか、そう言って貰えるの嬉しい」

静かに流れるA Vの映像。涙目で笑い合う唯依と悟、ビールを飲む。

○アライブ本社・社内

仕事中の唯依。

悟からのチャット。「今日飲みに行きませんか？」に「行きます！」と返す。

○BARレスト・店内（夜）

唯依が来店。テーブル席に悟の姿。

唯依「すみません、待ってました？」

悟「大丈夫です、さっき来たところです」

着席する唯依。

カウンター席に瞳と大雅がいる。

瞳「（楽しそう）おや、果たして三十分前をさっきといえるのだろうか」

悟、その声を聞き取り、瞳を見る。
つられて見る唯依、大雅を見て驚く。

唯依「えっ、大雅さん… お久しぶりです」

悟「お、お知り合いですか？」

唯依「はい、一緒に仕事したことあるスタイルストさんです。お隣の方は…？」

瞳「大雅の嫁の瞳ですー」

悟「えっ… 大雅さん確かあの」

瞳「ちなみに私はレズビアンで、彼はゲイだから、契約結婚です」

大雅「うん、そういうこと」

驚きつつも、へえと頷く唯依と悟。

瞳「あなたたち、先週あれから出来たでしょ」

唯依・悟「は…」

大雅「（呆れ笑い）瞳ちゃん…：：よくない癖が出てる」

瞳「だってどう見てもあの後ホテルに行った

雰囲気だったよ…」

悟「あ、あの時、いたんですか…」

唯依「いや、ホテルには行きましたけど…」

瞳「ほら、行ってるじゃないー！」

唯依、困った顔。

× × ×

カウンター席に座っている唯依、悟。

瞳「なるほどね。だったら尚更二人付き合っ

た方がいいよ。私が保証する！」

驚く唯依と悟。

瞳「二人絶対合うと思う。共通の悩みって結

構大事よ」

悟「いや、待って、話が飛躍し過ぎで」

唯依、自分の顎を摘んで、何かに納得

したように「うん」と呟く。

唯依「ありかも」

悟「ええええっ」

悟を見る唯依、しばし見つめ合う。

グラスを傾け、笑っている瞳と大雅。

大雅「瞳ちゃん酔ってる？」

瞳「まさか。あなた、ちょーっと、私の好み

だったんだけど、お似合いには負ける」

驚く唯依の肩を叩いてサムズアップす

る瞳。

唯依、悟を見てまんざらでもない顔。

○チャペル・結婚式

鐘の音、結婚式を挙げている唯依と悟。

T「数ヶ月後」

来賓の中に瞳と大雅もいる。近くに泣いている河原昭江（カワハラ）。

昭江「良かった、本当によかった……」

笑顔の唯依と悟。

○マンション・酒巻家リビング（夜）

1LDKの部屋。手狭な状態。

唯依がスマホを持って電話している。

唯依「持ち家？ まだいいって。先月結婚し

たばかりなのに」

昭江の声「ローン長いんだから、早い内に買

っておいた方がいいわよ」

近くのデスクに、付箋だらけの不動産

雑誌が置いてある。

唯依「（小声）すぐに見つかりやとつくに買

ってるっつの」

昭江の声「とにかく、あんな薄っぺらい部屋

じゃ、子供も作りづらいでしょう？」

唯依「うんざり顔。悟が帰宅する、無言でおかえりと言う唯依。」

昭江の声「お母さんだって、中々子供が出来なくて苦労したの。ねえ、頑張って孫の顔早く見せてちょうだいよ」

唯依、溜息をついて通話を切る。

唯依「まだまだ続く余計なお世話」

悟「お母さんから？」

唯依「うん、子供は？ 家は？ って」

悟「あー……。ねえ、話した方が良くない？

僕たちのこと」

唯依「子供へのこだわり凄いもの。理解してくれるとは思えない。でも……。その内、考える」

悟「うん、そうだね。ねえ、気晴らしにちょっと飲みに行こっか」

唯依、笑顔で頷く。

○BARレスト（夜）

店内に入る唯依と悟。

カウンター席に座っている瞳と大雅、
振り向いて唯依たちに気が付く。

唯依「こんばんは」

瞳「来たな、新婚さんたち」

唯依たちもカウンター席に座る。

× × ×

ウオツカライムを飲んでいる唯依。

唯依「口を開けば子供子供。まだ口出しされ
なきやいけないの」

大雅「唯依ちゃん、結構酔ってる？」

悟「これ、酔っている内に入らないです。ち
よっとスイッチ入っただけで」

唯依「そんな壁の薄い部屋じゃ子供作れない
って。余計なお世話にも程がありません？」

瞳「あはは、ウケる！」

唯依「でも、家は引越したいんですよ。

単純に古いし、狭いし。ねえ」

悟「うん。でも買うってなると大ごとだしね」

瞳「そうそう、ただでさえ都内。簡単にコス

パのいい家なんて手に入らないよ」

唯依「探したことがあるの？」

大雅「去年から結構探してるよね」

あれ？ と首を傾げる唯依。

唯依「二人同居するの？」

瞳「部屋が別なら同居でもいいかなって」

大雅「何かあったときに協力出来るようにはしておきたいから、その為の契約結婚だし」

悟「パートナーシップ出来ましたよね、でも契約結婚続けるんですか？」

瞳「うん、結局あれ法的効力はないから、病院運ばれても面倒見れないし、控除もないし、諸々出来ないことまだ沢山あるの」

大雅「元気な内はいいけどね、僕たちももうアラフォーってやつなので」

悟「なるほど……」

瞳「ただでさえ大雅んちは実家に勘当されてるから、絶対相続揉める」

大雅「瞳ちゃんそういうの頼り甲斐あるしね」

瞳「私は大雅のツテでモデルのいい子を紹介

して貰うつもり、なのにまだなんだけど！」

大雅「最近女の子の仕事少なくて」

ああー、と頷く唯依。

唯依「あっ、そういえばね」

唯依、鞆からタブレットを出す。

唯依「この間、仕事の撮影で使わせて貰った

家があるんです」

唯依、タブレットに画像を表示する。

庭付きの一軒家。ちよっとレトロ風。

唯依「仕事はずっと、こんなところに住めたらなーって思ってたの」

タブレットを回し見する唯依たち。

唯依「ここ、実は借家なんだって。家賃このくらい」

唯依、スマホを悟に見せる。

悟「あと十年……いや二十年待って」

瞳、タブレットをじっと見ている。

瞳「ねえ、一緒に住む？」

唯依、悟「えっ？」

瞳「大雅もどう思う？ この物件、結構いい

と思わない？」

大雅「うーん、そうだなあ」

瞳「私聞いたことあるの。色んな夫婦でルームシェアして暮らすの」

唯依「私も！聞いたことあります」

瞳「ルームシェアって学生とか若年層のイメージあるけど、別にどんな人がやってもいいでしょ？ 家賃は勿論折半、全員で」

悟、スマホで電卓を叩く。

悟「だったら、普通に一人暮らしの家賃と変わらないかも？ でも……」

唯依「魅力的だけど、お酒の場で決める話？」

悟「うん、ちゃんと検討した方が」

瞳「いい物件はすぐ決めないと！」

大雅「俺、キッチンの広い家に暮らしたい」

瞳「そうだ、彼、料理美味しいの」

悟「そうなんですか？」

決意した顔の唯依、スマホで電話する。

唯依「もしもし、すみません、先日撮影でお世話になった酒巻と申しますが……」

瞳「行動早っ」

悟「唯依さん決めると早いから……」

唯依、人差し指を口元に当てて皆に静かにするよう合図。内見の話を進める。

○シェアハウス・前

大きめの鞆を持った唯依が現れる。

唯依N「そうして、私たちの共同生活は唐突でありながら、割と普通に始まった」

唯依の後ろから現れる悟、唯依の荷物を持つ。

その隣を少ない荷物で颯爽と現れる瞳と大雅、そそくさと家の中へ入る。

鍵を持って慌てて追いかける唯依。

引越のトラックが到着する。

× × ×

ご近所に挨拶回りしている唯依。

東野充子（58）に挨拶している。

引越そばに熨斗、成瀬、酒巻の連名。

○同・ダイニング（夜）

段ボールのまだ残っている部屋。

瞳が立ち上がり叫ぶ。

瞳「もうやだ！ お腹すいた！」

唯依「そうだね、食材ないしお寿司取ってお

いたの、お酒は悟くんが買い出し行ってる

から……（冷蔵庫を開ける）えっ……」

野菜や調味料の充実している冷蔵庫。

大雅「近くに安くて沢山売ってるスーパーが

あったよ。ここ本当に立地いいね」

唯依「いつの間に……」

瞳「お寿司はお寿司で食べよう」

悟の声「ただいまー」

ビール袋を両手に下げている悟。

唯依「えっ、何この匂い」

悟「近くに美味しそうなたこ焼き屋さん見つ

けたよ、たこ焼きにはビールでしょう！」

瞳「お寿司にたこ焼き、何てわんぱく」

大雅「このたこ焼き美味しいよ」

唯依「もう食べてる……」

大雅「だってあったかい内に食べなきゃ」

唯依「そうだけど！ ちょっと瞳さんー！」

瞳「大体こんな感じよ。私ワイン飲みたい」

大雅「あっ！ そうだ！ パスタ食べよう！」

唯依「えっ… 何で…」

キッチンで上等な深鍋を掲げる大雅。

大雅「これ使ってみたい！」

唯依「あれ何だっけ？」

悟「ほら、お義母さんから貰ったお鍋」

唯依「ああ、一度も使っていないやつ」

鍋で湯を沸かし始める大雅。

悟「（たこ焼きを食べながら）皆自由ー」

唯依「自由過ぎでしょー」

悟、たこ焼きを一つ唯依の口に運ぶ。

食べる唯依。

× × ×

ダイニングテーブルに広げられている

料理と酒。

唯依、寿司を見て顔を顰める。

唯依「ねえ、何でこれシャリしかないの？」

四分の一くらいの寿司が、シャリだけになっている。

大雅、テーブルにパスタを置く。

サーモンとレモンバターのパスタ。

唯依「大雅さん、このパスタの具材って」

大雅「ああ、この上に乗ってたやつ使ったよ」

唯依「嘘でしょ？」 お寿司なのにシャリだけにしてどうするの？」

瞳、爆笑している。

大雅「ええー、ふりかけならあるよ」

唯依「何の為のお寿司？」

大雅「え、ふりかけ好きじゃない？」

悟「酢飯にふりかけは微妙だねえ」

大雅「そうかー……」

大雅、シャリを別皿に上げて回収する。

× × ×

テーブルに置かれる、錦糸卵とカニのちらし寿司。

大雅「卵とカニ缶があったから、なんちゃつてちらし寿司」

唯依 「（感激）凄い。ごめん。悔った」

瞳 「ねえ、お腹すいた食べるねー」

唯依 「あっ、待って待って、乾杯！」

皆バラバラに酒を持って乾杯する。

× × ×

半分くらいに減っている料理。

唯依は日本酒、悟はビール、瞳は白ワ

イン、大雅はハイボールを飲んでいる。

唯依 「何て統一感のない食事」

瞳 「個性全開。でも楽しいね」

悟 「大雅くんがこんなに料理上手いなんて、

胃袋掴まれそう」

唯依 「もう掴まれてるー」

大雅 「お二人、結婚して良かったでしょ」

瞳 「何、キューピットは私だよ？」

唯依 「本当、お二人がいなかったら私たち結

婚してなかったですからー」

唯依、グラスを揺らしながら笑う。

瞳 「お節介だとは思ったけどね」

大雅 「半分くらい面白がってたでしょ」

唯依「人の性の悩みを、酷いー」

瞳「夫婦だからって、絶対セックスしなきゃいけないなんて、ただの人間都合なもの」

唯依「まあ、二人もそうよね」

瞳「事情は違うけどね、お互い納得した形だもの、何だっていいんじゃない、周りに迷惑かけてなければ」

唯依「賛成」

互いのグラスを重ね、乾杯の音を鳴らす唯依と瞳

× × ×

テーブルを片付けている唯依、悟。

悟「楽しい生活になりそうだね」

唯依「うん」

通知音にスマホを見る唯依、溜息。

悟「どうかした？」

唯依「お母さんから、引越どう？ っ。住

所伝えたくないなあ。押しかけてきそう」

悟「教えないのは流石に……」

唯依「やっぱり？」

唯依、仕方なくスマホを操作する。

○同・ダイニング（朝）

ネクタイ姿の悟がパンを食べている。

仕事着の唯依、焦り気味でやって来る。

悟「おはよう、え、急ぎ？」

唯依「おはよう、早出なの忘れてた！」

唯依、冷蔵庫から卵を取り出し、卵かけご飯を作る。

悟「（心配そう）じゃあ、そろそろ行くね。」

あっ、そのランチバッグおにぎり入ってる

よ」

唯依「ありがとう！ 行ってらっしゃい」

ジャケットを着て出勤する悟。

仕事着の瞳がやって来る。

瞳「おはようー、行ってらっしゃーい」

手を振り、家を出る悟。

卵かけご飯を食べ終わる唯依。

瞳「置いといてくれたら洗っとくよー」

唯依「素敵！ ありがとう！ 助かる！」

唯依、慌てて洗面所へ向かう。

サンドイッチを食べている瞳。

パジャマのままの大雅がやってくる。

髪をセットした唯依が戻ってくる。

大雅「唯依ちゃん、待って、襟出てる」

唯依「さすがスタイリスト！　ありがとう！」

瞳、大雅「行ってらっしゃい」

慌てつつも笑顔で家を出る唯依。

○ビジネス街（朝）

出勤する人々の中に悟の姿。

唯依N「住み始めて早一ヶ月が過ぎ。私たち

の共同生活は至って順調で、皆それぞれ暮

らし、働いていた」

× × ×

唯依、オフィスビルに入っていく。

○アライブ本社・撮影室

子供服の撮影が行われている。

お洒落な服を着た子供たちがカメラの

前で戯れている。

後ろからその様子を見ている唯依と圭子（杏）。

女の子が一人、唯依たちの元へ駆け寄る。唯依、子供の目線にしゃがむ。

唯依「可愛かったねえ、その服、気に入ってくれたかな？」

笑顔で頷く女の子。嬉しい唯依。

唯依「ありがとうー！」

女の子の頭を撫でる唯依。

女の子、呼ばれてカメラに向かう。

圭子「可愛いわよねえー天使ね」

唯依「ええ、ホントにー」

女の子をにこやかに眺める唯依と圭子。

○片倉出版本社・執務室

テーブルに向かい合って座り、ミィテ

イングしている悟と内藤（43）。

内藤「酒巻、結婚生活はどうだ？」

悟「ああ、いい感じですよ」

内藤「確か嫁さん年上だったよな」

悟「二歳差なので、そんな変わらないですよ」

内藤「お前ももうアラサーだろ、そろそろ考えておいた方がいいぞ」

悟、意図がわからず首を傾げる。

○アライブ本社・撮影室

唯依の腕を小突く圭子。

圭子「河原さんも、そろそろ作りなよー」

唯依「え」

圭子「本当に体力のある内に作らないと」

唯依、ほんの少し眉を顰める。

○片倉出版本社・執務室

悟の肩を叩く内藤。

内藤「子供だよ子供」

悟「（微妙な顔）あ、ああ……」

内藤「俺のところも嫁さん年上でさ、結婚自体遅かったから、結構苦労したんだ」

悟「は、はあ……」

悟、気まずい顔。

内藤「女の人はいつまでも子供を簡単に作れるわけじゃないから、早めに考えておいた方がいいぞ？」

悟「いや、いつだって簡単には作れないですよね……」

内藤「そうだよ、だからちゃんと考えてやれよ？　うちにはちゃんと育児もあるから」

悟「（苦笑）ありがとうございます」

内藤を呼ぶ声。立ち上がる内藤を見る悟、微妙な表情。

○アライブ本社・撮影室

撮影中の女の子を見ている圭子。

圭子「河原さん、子供好きでしょ。なのに子供いないんじゃないあ、子供服の仕事してもしようがないでしょ、ねえ」

唯依、苦笑いする。

スタッフ「圭子さん、手直しお願いします！」

圭子、子供達の元へ向かう。

うんざりする唯依と悟の顔、同時に。

唯依・悟「余計なお世話ー…」

深く溜息をつく唯依と悟。

○シェアハウス・ダイニング（夜）

帰宅する唯依。

唯依「ただいまー、どうしたのこれ」

テーブルの上にホットプレート。

悟が一人、屋台の如く大量の焼きそばを作っている。

悟「何か、無性に、食べたくなくて」

悟、顔中に汗を浮かべている。

瞳が帰って来る。

瞳「ただいま。ソース臭の正体はこれか」

瞳、鼻で匂いを思い切り吸い込む。

× × ×

ホットプレートを囲む唯依たち。

I P A ビールの瓶が四本並んでいる。

唯依「これ、どこのビール？」

悟「わかんない、高いコーナーにあるやつ買

って来た」

瞳「これはグラスに注いだ方がいやつだ」

瞳、棚から大きめのグラスを三つ出し、

三本それぞれ注ぐ。

唯依「悟くんが高いビール買って来るときは、

大抵モヤっとしてるとき、何かあった？」

悟「ご名答……」

瞳「まあ、まず食べよう。ほら乾杯ー」

唯依たちが乾杯し、大雅が帰って来る。

大雅「焼きそばだ！ 美味しそう！」

瞳「ちよつといいビールもあるよ」

大雅「ビール！ 正解！」

唯依、大雅のグラスを用意する。

× × ×

焼きそばを食べている悟。

悟「会社でさ、早く子供作れ、って先輩から

言われて」

瞳「なるほど、その類か」

悟「これがまた配慮満点で言うんだよ。休暇

も使えよとか」

唯依「私も、自分が元気な内に子供作りなよ
って言われた」

大雅「何で元気な内がいいの？」

唯依「産むにも体力がいるし、そして子供は
全力で走り回るから」

焼きそば食べつつ、納得し頷く大雅。

唯依「しかも、子供いないくせに子供服の仕
事してどうするのとか」

瞳「仕事は仕事、家庭は家庭なのにね」

大雅「いっそいらぬ派ですって言うとか？」

唯依「だったら何で結婚したのとか面倒なこ
とと言われる」

悟「言われそうー」

唯依「本当の理由なんて言ったら、同情と憐
みの目線。想像するだけでも、しんどい」

瞳「二人はちゃんと好きで結婚したのにね、
放っておいておくれよ」

唯依「ねー」

焼きそばを食べ続ける唯依。

× × ×

テーブルを片付けている唯依、スマホの震えに気づき、画面を見る。

唯依「何故いつも食後の絶妙なタイミングに少し表情を顰めてから電話に出る。」

唯依「もしもし、どうしたの？」

昭江の声「あのね、今度そっちに行こうと思ってるの、ご飯付き合って」

唯依「え、何で」

昭江の声「いいじゃない。休みいつなの？」

唯依「（困惑）そんな突然言われても、予定確認しないと」

昭江の声「わかった、空いてる日がわかったらまた連絡ちょうだい、いいわね、じゃあ」

唯依、スマホを見て面倒臭そうな顔。

キッチンで洗い物をしている悟と大雅。

唯依の様子を見て話している。

悟「またお義母さんからかな」

大雅「心配そうだね？ 折合い悪いの？」

悟「いや：：うーん、何でそんなにお母さんと遠慮してるのかなあって」

大雅「ご家庭はそれぞれだよ。俺たちだって」

悟「それは契約結婚だからこそ一線を引いて
るのでは？」

大雅「それもあるけど。うーん」

首を傾げる悟。

大雅「瞳ちゃんは強いし、基本それぞれお好
きなように。でももしもの時は助ける、俺
たちなりに家族の務めは果たせるようにと
は思ってるよ」

悟と大雅、食器を片付けている唯依と
瞳を見る。

○ n e x t u r e ・ 会 議 室

財務系の資料を表示し、プレゼンして
いる瞳。

瞳「説明は以上になります。質問はございま
すでしょうか？」

上座に座っている男性役員、笑顔。

瞳、一礼する。

× × ×

会議が終わり、備品を片付けている瞳を遠巻きに見ている若手男性社員たち。

男性社員A「さすが次の幹部候補」

男性社員B「そりゃあ女子にもモテるわ」

片付けの手が一瞬止まる瞳。

○同・フリーアクセスフロア

瞳、ノートパソコンを操作、パソコンの天板には虹をモチーフにしたステッカーが貼付されている。

佐藤哲（37）が現れ、椅子に座る。

哲、すらりと背が高く、女性らしいメイクとスーツを着ている。

哲「ねえ、営業の新しい子、好みじゃない？」

瞳「会社の子に手を出す趣味はありません」

哲「一応ここでは人妻だもんね」

瞳「一応、って何。ちゃんと籍は入れてる」

哲「契約結婚ってどうなの？ 今は一緒に住んでるんでしょ、普通にされてられる？」

瞳「普通よ普通、部屋も別だし、普通の共同

生活。法律がどうにかなったら解散予定」

哲「ドライねえ」

瞳「恋人は恋人、家族は家族、別々に考えた
っていいじゃない」

哲「ふーん。で？ 結局その恋人は？」

瞳「（悲痛）いないの！ 誰か紹介して！」

瞳、哲の腕を掴んで縋る

× × ×

リモート会議の準備をしている瞳。

パソコン画面、瞳の顔はカメラオフで

まだ非表示、音声もミュート状態。

女性社員AとBが先にログインしてお
り、話をしている。

女性社員A「才色兼備だからって、私生活ま
で充実してるとは限らないよ」

女性社員B「普通の人だったらモテまくりで
しょ。だから競争率減って助かるー」

瞳、イラっとする表情。

深く溜息をついた後、平静を装ってカ
メラとマイクをオンにする。

瞳 「お疲れ様です」

女性社員たち、弱々しい声で挨拶する。

○シェアハウス・ダイニング（夜）

帰宅する瞳。

瞳 「（疲れ気味）ただいま」

大雅、アクアパツアを作っている。

悟、慣れない手つきでサラダの野菜を

切っている。

瞳、その様子を見て、ほっと肩を撫で

下ろし、表情を綻ばせる。

テーブルを用意している唯依、ん？

という顔。

× × ×

テーブルの真ん中にアクアパツア。

他サラダや惣菜いくつか。

四つの箸が思い思いに料理をつつく。

瞳 「んー！ 美味しい！」

唯依 「瞳さん、良かった元気になった。凄い

どんより声だったよ」

瞳「そうか、ここでは緩んじゃうな」

悟「いいじゃないですか？　それが家だし」

瞳「そっかー、そうだねえ」

瞳、ほっと笑い、一息つく。

瞳「今の会社ね、凄くやり甲斐あるし、マイ

ノリテイにも理解あるし、レインボーパレ

ードとかも出ててさ」

大雅「うん、そこで俺たち出会ったもんね」

瞳「でも百人いて百人が同じ理解をしている

わけじゃなくて。そりゃ当然なんだけど」

唯依、箸を止めて瞳に耳を傾ける。

瞳「レズビアンだからっていう前提から、皆

思い思いに勝手なことを考えるんだよね」

大雅「まあ、知らないからね。でもそれって

同性も異性も同じだよ、皆、人ごとだもん」

瞳「そうそう、人ごと。わからないならわざ

わざ話さなくてもいいのにね。なのに皆、

知っていることにしたい」

唯依「人間とは知識欲旺盛な生き物だから」

悟「それって、そんなに美味しいのかな」

唯依「ジャンクフードってやめられない」

悟「確かに、ポテチ途中でやめられない」

瞳「この具沢山アクアパッツアもさ、凄く美味しいけど、殆ど海の幸。だから美味しく思えるのかも」

大雅「美味しいは正義でしょ」

瞳「うん。でももし、ここに牛肉が入って来たらびっくりするよね」

大雅「入れてみる？」

瞳「（苦笑）また今度ね。いやー、前の会社に比べたら断然マシなのになあ」

唯依「前の会社？」

瞳にワインを注ぐ唯依。

○（回想）古賀商事・会議室

現在より少し硬めのスーツを着ている

瞳（31）が着席している。

瞳一人に対し、向かいに後藤（55）と

二人の男役員が座っている。

瞳の前に一枚の書類。辞令と書かれて

いる。島根支社への異動。

瞳 「（不満） どういうことでしょうか？」

後藤、一枚の書類を瞳に見せる。

インスタのようなSNSの画像。

レインボー系のイベントで女性と瞳が
手を繋ぎ、笑顔で写っている。

画像のタグにLGBTQや同性愛を表
すものが幾つかある。

後藤 「これは君で間違いない？」

瞳 「ええ、確かに私です。しかしこれはプラ
イベートの活動です。何か問題でも」

後藤 「問題がないと？」

瞳 「不適切な画像ではありません」

深い溜息をつく後藤たち。

後藤 「公序良俗という言葉があるだろうか？」

瞳 「（不愉快） 仰っている意味が分かりませ
ん。これを理由として、私をど田舎に島流
しする理由を論理的かつ平等性ある観点で
教えてください」

後藤 「会社でそのようなかわしい目で見

られては困るといふ意見があつてね」

瞳 「（啞然）いつ私がそんな目で見ましたか？」

後藤 「そう思われているということだよ」

瞳 「でしたら、女性社員の胸元や下半身を見て鼻を伸ばしている男性社員が左遷されないのは何故ですか」

言葉に詰まる後藤たち。

瞳 「マナーを守るのは同性愛者も異性愛者も同じです」

後藤 「（写真を差し）このようなことをされては、他の社員に悪影響が及ぶ」

瞳 「どのような？ 逆に私の方こそいかがわしい扱いを受けているように感じます」

後藤 「自意識過剰ではないのか」

瞳 「私生活を勝手にほじくられて不愉快に思うことは、自意識過剰なのでしょうか？」

押し黙る後藤たち。

瞳、立ち上がり会議室を出て行く。

×
×
×

戻ってくる瞳、テーブルに書類を叩きつける。大きな文字で「退職願」。理由の文章はなく署名捺印のみ。

○元のシェアハウス・ダイニング（夜）

瞳、ワインを揺らし溜息をつく。

瞳「恋愛は男女だけのもの、女は早く子供産むもの、男は女を養うものってね」

唯依、頷く。

瞳「現実はそのような考えが根本からない人が方がまだまだ多い。当事者や気付けた人が動くしかないんだと思う」

大雅「動くの？」

瞳「動いてやるわよ、いずれね」

大雅「そうこなくっちゃ」

大雅、ウイスキーグラスを瞳のワイングラスに重ねて乾杯する。

唯依「瞳さんのそういうところ、本当尊敬する。かっこいい」

瞳「ありがとう。でも唯依ちゃんも沢山戦っ

てるんじゃない？」

唯依「うん……」

唯依、グラスを傾ける。

○同・庭（夜）

ベンチに座り、コーヒーを飲んでいる

唯依と悟。

唯依「瞳さんくらいはつきり言えたらなあ」

悟「お義母さんのこと？」

唯依「うん……、実は今日も電話かかってきた。言ったらどうなるんだろうって考える。と。踏み出せないっていうか」

悟「お義母さんにはそんなに言い辛い？」

唯依「四国のまあ、田舎の方で。嫁は家に入って子供産み育てるもの、っていう文化で暮らして来ちゃったから」

悟「唯依さんにもそうなってほしいのか、……子供、かあ。そんなに産まなきゃいけないのかなあ」

唯依「……え」

悟「いや、簡単に考えちゃダメだよね」

唯依「うん……、ごめん、何か巻き込んで」

微笑む唯依、悟に肩を寄せる。

○アライブ本社・執務室

仕事中の唯依。スマホが震える。昭江からの電話。

唯依「ついにこんな時間にまで……（電話に出る）もしもし？」

昭江の声「もしもし、ねえ次のお休みいつ？」

唯依「まだわかんない、ねえ、そんなすぐじゃなくても」

昭江の声「そう言っただけになるのよ。何か困ることでもあるの？」

唯依「いや……別に……」

昭江の声「まさか二人、実は契約結婚だとか、結婚してないとかじゃないわよね……」

唯依「それは私じゃな……いや、違う、違うから！ちゃんと結婚してる！」

昭江の声「ならちゃんと夫婦としての勤めを

しない。最近の子供作らない人もいるみたいだけど、自分勝手な人のすることだわ」

唯依「……」

昭江の声「早く確認して連絡しようだい。わかったわね」

切れる電話の音。唯依、困惑の表情でスマホの画面を見る。

唯依「自分勝手……か」

重々しくスマホをデスクの上に置く。

○唯依の実家・居間（夜）

隅に仏壇、中心に大きな座卓。座卓の前の昭江、ガラケーの電話を切る。卓上に雑誌、表紙に「二世帯住宅で老後は安心」のタイトル。

立ち上がって仏壇の前に座る昭江。

昭江「お父さん、この家に一人は広過ぎるわ。家族がいなくてこんなに寂しいのね」

昭江、仏壇に手を合わせる。

昭江「お義母さんたちの考えも、あながち間

違ってなかったわ……」

溜息をつく昭江。広々とした居間。

○シェアハウス・ダイニング（夜）

牛肉入りのアクアパッツアを食べている唯依たち。

瞳「ちょっと、牛たちアピール激しいね」

大雅「うん、相入れない世界はあるね」

箸の進みが悪い唯依、溜息をついている。大雅が心配そうに見る。

大雅「ごめん、美味しくなかったよね？」

唯依「えっ、ああ、ごめんなさい、違うの！

実は……、母がこっちに来たいって言い出して……」

悟「ついにそう来たか……」

瞳「まだ事情は知らないんだっけ。話せば通じるかもしれないよ？」

大雅「いっそ会ってみたいけどね、俺たちはウエルカムだよ」

唯依「その気持ちはありがたい、けど」

黙り込む唯依。

悟「やっぱり唯依さんらしくない、かも」

唯依「え？」

悟「だって、いつもの唯依さんなら前向きに出来るか考えない？ 何でお義母さんのことになると後ろ向いちやうんだろう？」

唯依「だって、自分のことだけじゃないもの。

母が、皆に何か不愉快なことを言いそうで、不安」

悟「……そっか。それで自分が居づらくなっちゃうことが、もしかして怖い？」

唯依、悟の言葉に答えられない。

瞳と大雅、目を見合わせる。

瞳「だったら気にしないで！ 言われ慣れてるから！」

大雅「そんな人多数の中を生きてきたからね」

唯依「慣れてるからって言っていていいことにはならないよ……！ 今回はランチ付き合うだけ。家には連れてこない」

悟、唯依を心配そうに見ている。

瞳「了解。それはともかくとして、これ（ア
クアパツツア）どうする。全然進んでない」

大雅「分解しよう、肉と魚を分けよう」

唯依「ごめん、ごめん食べるよ！」

唯依、肉ばかりを皿に取っていく。

○同・唯依たちの寝室（夜）

スマホを見ている唯依、隣に座る悟。

悟「そんなに気難しいお母さんだった？」

唯依「うん……、性格というより、母もまあ、
悩んでいた頃があった」

○（回想）河原家・居間（夜）

鯉のたたきなど、料理が並ぶ食卓。

河原堅三（70）とみつ（67）にお酒を

注いでいる昭江（63）。近くに唯依

（7）。

唯依の声「うちの田舎、嫁は子供産むものっ
て意識が強くて」

みつ「やっぱり一人で精一杯だったわね」

堅三「これ以上昭江さんに無理はさせられな
いだろうか？ 一人も産めなかったよりはマ
シだ」

みつ「唯依ちゃんはまともな体に育つによ？」

みつ、唯依の頭を撫でる。

昭江、無表情で自分の皿にある鰹に箸
を刺している。

唯依、昭江を不思議そうに見ている。

○元のシェアハウス・唯依たちの寝室（夜）

唯依、溜息をつく。

唯依「母もプレッシャー受けて生きてきた人
だったから言い辛くて。わかってくれるか
な……自信ない」

悟「どう伝えるかが大事だね、あの、ラブホ
の勢いで行ければ何でも何とかなるよ」

唯依「あれはダメでしょ！」

あっ……となる悟。唯依、苦笑い。

○同・ダイニング（朝）

ミュージシャンのような服を着た大雅が、ホットサンドを食べている。

唯依と悟、キッチンで洗い物している。

大雅「唯依ちゃん、このサンド美味しいね、焼肉風味がいい感じ」

唯依「昨日の結局余ったアクアパッツアの肉、無理やり何とかした。今日は撮影？」

大雅「うん。じゃあそろそろ行って来ます」
唯依「行ってらっしゃい」

大雅の皿を洗っておくよと受け取る悟、礼を言って出勤する大雅。

その後ろ姿を見ている唯依。

唯依「おっしゃれー」

唯依、悟と目を見合わせて笑う。

○スタジオ・撮影フロア

ハイセンスな服を着た真鍋悠（29）を撮影している。その様子を後ろから見ている大雅と沢倉（36）。

沢倉「どうなの、結婚生活は」

大雅「普通だよ？」

沢倉「いや、普通じゃないでしょ。ゲイなのにビアンの子と結婚して住んでるとか」

大雅「そうかなあ。そもそも普通ってなんだろうねえ」

沢倉「ん？」

大雅「俺たちは普通であるが為に生きてるのかな？ っつて」

沢倉「そうじゃないの？ まあ、ノンケと俺たちの普通は違うけどさ。だって結婚しちゃったら彼氏作れなくなるよ」

大雅「え？ いや、案外そうでもないよ」

沢倉「え、そうなの？」

大雅、真鍋のいる方向へ視線を向ける。

真鍋、チラリと大雅へ微笑む。

沢倉「（察する）今度はいつまで続くかなあー」

大雅「うーん」

黙ってスタジオを見つめる大雅。

○同・衣装部屋

スマホを見ている大雅、画面に「飲みに行かない？」の文字。

「ごめんね、無理」と返す。

大雅の後ろからそっと抱きつく真鍋。

真鍋「奥さん？」

大雅「ん？ 違うよ、元彼」

真鍋「（小さく驚き）えっ」

大雅「飲みに誘われたけど、断った」

真鍋「（拗ね気味）大雅さんはモテるから」

大雅「でも、すぐ離れちゃうんだよね。俺は

一人がいいって思われちゃう。実際、同じ

人と同じ時間を過ごし続けるのは苦手」

真鍋「え、奥さんは？」

大雅「奥さんは恋人じゃないから。家族」

真鍋「俺にはその違い、難しい。俺とも飽き

ちゃう？」

大雅「飽きないよ」

大雅、振り向いて真鍋をハグするが、
どこか切なそうな顔。

○シェアハウス・リビング（夜）

ウイスキーを飲む大雅と、赤ワインを飲む瞳がソファーに並んで座っている。

大雅「新しい彼氏が出来ただけだ。またすぐ終わっちゃうのかなーって」

瞳「なに、惚気？」

大雅「惚気たいけど、惚気られる程まだ付き合いきれてない」

瞳「なのにもう終わりの話考えてるわけ？」

大雅「自分の生きたい人生と、相手の生きたい人生って違うでしょ」

瞳「そりゃあ、人は十人十色ですから。でもわざわざ考えてたら、しんどくない？」

大雅「そっか、しんどかったのかー」

瞳「（呆れ顔で笑い）今頃？ もう！ そんなに悩ましいなら、今彼を連れて来なさいよ。私が見定めてあげる！」

瞳、笑って大雅の太ももを叩く。

○同・唯依たちの寝室（夜）

ベッドの上、寄り添って座っている唯依と悟。悟は雑誌を読んでいる。スマホを見ている唯依、スマホが震えて反応、驚きの声をあげる。

悟「どうしたの？」

唯依「お母さん、明日こっち来るって」

悟「ええええええっ」

ベッドの上に立ち上がる唯依と悟。

○品川駅・改札前

改札外で待つ唯依、スーツケースを持ってやって来る昭江を出迎える。

唯依「ねえ、こんな突然来られたら困る、今

日休みじゃなかったらどうしてたの」

昭江「いいじゃないの。ねえ、折角の東京よ、おしゃれなお店連れてってちょうだい」

唯依、スーツケースを受け取り歩く。

○カフェ・店内

若い女性メインのカフェ。

ランチを食べている唯依と昭江。

昭江、ウキウキと食べている。

唯依「……で、突然何で来たの？」

昭江「突然、って、この間からずっと連絡してたでしょ。なのに唯依の返事がないから」

唯依「だからって前日に連絡するのは急過ぎ」

昭江「（少し拗ね気味）だって、家にいても一人よ、娘の顔を見に来たっていいでしょ」

唯依、しようがないと苦笑し溜息。

× × ×

食後のコーヒを飲む唯依と昭江。

昭江「新居はどう？ 悟くんは元気？」

唯依「（少し戸惑い）うん、元気にしてる」

昭江「ねえ、最近どうなのよ」

唯依「何が」

昭江「子供よ子供」

唯依、またかと昭江から目を逸らす。

昭江「だって子供のいない人生なんて、寂しいに決まってるじゃない」

悲しげに言う昭江。

唯依、少し同情の顔を見せる。

唯依「ご近所さんとか、ちゃんと話してる？」

昭江「話してるわよ、老後の話ばかり」

唯依「そりゃあ、そういう歳なもの」

昭江「皆、子供とどうするかって話をしてる」

唯依「いずれは考えないといけないけど」

昭江「それまでにあなたたちはどうするの？」

唯依「……」

昭江「私だって、早く孫の面倒みたいのよ」

唯依、鬱陶しさと同情のないまぜにな
っている表情を見せる。

唯依「そういう話は、こんな突然来た時にじ
ゃなくて、ちゃんと改めて話をしよう？

悟くんにも相談しておくから」

昭江「そうやって先延ばししていたら、お母
さんみたいに歳とっちゃうのよ。もしかし
て、体に不安でもあるの？」

唯依「（顔をこわばらせ）それは……」

昭江「心配なら、そういう病院にちゃんと行
きなさい、悟くんも連れて。何事も早い内

に確認しておく方がいいから」

唯依「（少し苛立ち）お母さんに心配して貰うようなことは何もないわよ」

昭江「心配するに決まってるでしょう？ 三十過ぎたら、子供も難しくなるし、出来ても元気に産めないかもしれない」

唯依「だから、余計なお世話なの」

昭江「何が余計なお世話なの。私はあなたのことを心配して」

唯依「そこまで心配して貰う歳じゃない」

昭江「子供を心配するのは幾つでも同じよ」

唯依、口を噤む。

○同・外

カフェから出てくる唯依と昭江。

昭江「家どっち？」

唯依「え？ は？」

動揺する唯依。無視して歩き出す昭江。
唯依、慌てて追いかける。

唯依「結構遠いから、また今度にしよう？」

昭江「大丈夫よ、私は時間あるから」

唯依「突然は困る！ 何も準備してない！」

昭江「散らかってるくらい気にしないから」

昭江、笑顔で唯依の肩を叩く。

唯依「そうじゃなくて！」

昭江、立ち止まる。

昭江「何かやましいことでもあるわけ？」

唯依「な……何もないけど」

昭江「何かあったらお世話になるのよ？ い

っ行っちゃって一緒じゃない」

唯依「は？ だからって！」

昭江「何よ、折角お母さんわざわざ東京来た

のに、家に行くくらいいいじゃない！」

困り果てる唯依、言い返せない。

○バス停

バスを待っている昭江。

唯依、少し距離を置いて電話している。

唯依「ねえ、今日早く帰ってこれる？」

○片倉出版・執務室

悟、自席でこっそり電話をしている。
悟「ごめん、会議があつてすぐ上がれそうに
ない。瞳さんや大雅さんはどう？」

○nexture・会議室前

会議室の前で電話している瞳。

瞳「ごめんー、私もすぐに帰れない。大雅は
今日いないんだっけ？」

○バス停

唯依、がっかりしている。

唯依「大雅さんも電話したんだけど繋がらな
くって。朝いなかっただから仕事だと思ふ」

瞳の声「あいつのスケジュールは読めないな
：：メッセージ送っておいたら？ あっ！
そういうえば、洗濯物：：」

バスが来て、瞳の言葉を昭江が遮る。

昭江「唯依ー！ 来たわよ！」

唯依「ごめん、何かあったらまた連絡するね」

唯依、慌てて電話を切り、困惑の表情で昭恵の元へ向かう。

○シェアハウス・前

玄関の前に立つ唯依と昭江。

昭江、嬉しそう。

昭江「何よ、いい家じゃない！　こんな大きな家よく二人で住めたわね。あっ、ちゃんと考えてるんじゃない将来のことー！」

唯依「え、いや……」

唯依、はっとポストに気が付く。

酒巻、成瀬の文字。

唯依、ポストの前に立って名前を隠す。

昭江「ごめんね、私も焦って。いい家よ、庭もあるし、兄弟で遊ぶのもいいわねえー」

唯依「じゃあ、お母さん、ホテルに帰ろう」

昭江「は？　どうして？　家に来たの？」

唯依「だって何の準備もしていないもの」

昭江「だから気にしなくていいから、ほら」

唯依、迷い、困惑。

○同・玄関

昭江、靴箱を見て少し怪訝な顔。

昭江「二人とも凄い沢山靴を持ってるのね」

唯依「ほ、ほら、アパレルの仕事してるから」

尖った男物の靴に、昭江の目が向く。

昭江「悟くんこういう趣味だったかしら？」

「なんか、サイズも変じゃない？」

唯依「いいからもう、上がるなら上がって」

唯依、強引に昭恵を中にあげる。

○同・ダイニング

昭江、食器棚を見て怪訝な表情。

昭江「二人にしては食器買い過ぎじゃない？」

唯依「友達を呼ぶと、ほら、結構使うの！」

昭江「友達と呼んでるのに、私は呼んでくれ

ないのね……」

唯依、面倒臭そうな顔で昭江をテーブル

ルに座らせようとするが、すり抜ける

昭江、リビングに向かう。

○同・リビング

リビングのソファ―に畳み掛けの洗濯物、ハツとする唯依。

先に昭江がその洗濯物を摘む。

昭江「もう、こういうのはちゃんと……」

メッシュ系の、やや派手な色の男物トップス。唯依の顔が引き攣る。

昭江「これ、悟くんの服？」

唯依「さ、最近趣味変わったの。イメチェン」

昭江「ええ？ ちょっと悪趣味よー」

唯依、必死に誤魔化し笑っていると、後ろから玄関の開く音がして振り向く。

昭江「悟くん？ 帰って来たのかしら」

リビングに現れる大雅。

唯依、愕然とする。

昭江「どなた？」

唯依「な、何で帰って来たの……？」

大雅「え、だってここ、俺たちのうち」

昭江「はあ……」

唯依「携帯見てないの……」

大雅、スマホを取り出し見て、笑う。

大雅「ごめん、見てなかった」

昭江の後ろで青ざめている唯依。

大雅の後ろから真鍋が顔を出す。

真鍋「どうしたの？」

昭江「あなたもどちら様」

大雅「ああ、ボーイフレンドです」

昭江「この人も」

唯依「この人も」 ああっ、違うの！

唯依、大雅の元に駆け寄り腕を掴む。

唯依「普通自宅に連れて来ます」

大雅「えっ、だって嫁公認だよ？」

昭江「嫁公認」

大雅、昭江の手にある服に気が付く。

大雅「あっ、この服探してたんだよー、俺の

お気に入り。この服良くない？」

大雅、昭江の手から服を取り、真鍋に

見せている。

昭江、頭を押さえよろめき始める。

昭江「唯依！ 私はそんなふしだらな子に育

てたつもりはありません！」

唯依「は？　ちよつと、だから、違うの！」

昭江「こんな、二人も男を誑かして」

唯依「違うの！」

大雅「（真鍋と顔を見合わせ）えっ、俺たち

誑かされてた？」

唯依「違うのー！」

玄関が開き、慌てて駆け寄る音がして、

悟が現れる。

悟「唯依さん！　間に合っ……？」

悟の前に立つ昭江。

昭江「この甲斐性なし！」

昭江、突然悟の顔を平手打ちする。

悟、頬を手で抑え床に打ち崩れる。

吃驚する唯依たち一同。

昭江、目に涙を浮かべ始める。

昭江「あんたがそんなだから！　この子はこ

んな男を、しかも二人も侍らせて！」

唯依「違うの、この人は……！」

昭江「ああもう、聞きたくない！」

玄関の開く音、瞳が帰ってくる。リビ
ングの様子に呆然。

昭江、ついに床に座り泣き崩れる。

悟、打ち崩れているまま。

項垂れる唯依。

瞳「時すでに遅し……か。カオス……！」

洗濯物を片付け始めている大雅。真鍋
もそれを手伝う。

瞳「ねえ、どういう状況？」

大雅「（昭江を差し）こちら、多分、唯依ち
ゃんのお母さん」

瞳「でしようね」

大雅「（真鍋を差し）こちら、今彼の悠くん」

瞳「ああーどうもー、初めまして、嫁です」

昭江「え？ 嫁……？」

瞳「その様子だとご説明はまだ……？」

唯依「お母さん、この人たちは夫婦なの。私

とそういう関係じゃない」

昭江「じゃあ何でここに帰ってくるの？」

唯依「それはこの家をシェアしているから」

昭江「シェア？」

唯依たちを見渡す昭江。

大雅の畳んだ服を受け取る真鍋。

昭江「そんな、よその夫婦と一緒に住むなんて。こんなところで子供なんて作れるの？」

悟「いや、僕たちは……」

よろよろ立ち上がる悟、しかし口籠る。

昭江「ましてやこんな一つ屋根の下で間違いでもあったら……！ さっき、ボーイフレンド、って」

唯依「（溜息ついて）この人たちとは、何もないし、何も起きようがないの」

大雅「（真鍋を差し）お母さん、彼は、俺のボーイフレンドです」

昭江「は……？」

大雅「（瞳を差し）彼女は、俺の奥さん……という契約を交わしています」

昭江「は……？」

大雅「奥さんは、ただいま彼女募集中です」

昭江「は……？」

瞳「え、その情報いる？」

昭江「契約ってなに？ 唯依たちもそういう仲なの？」

唯依「それは違うの、その……」

瞳「私たちのことくらいはちゃんと説明しておこうか？」

瞳、昭江の前に正座する。

瞳「お母さん、私と彼は同性愛者なんです。でも、リスクヘッジの為に法律上の婚姻だけをしました。それだけです」

昭江、はあ？ という顔をしている。

瞳「だから、お母さんが心配しているようなことはないので安心してください」

唯依「ルームシェアをしているのは、単純にこの家に住みたかったから。でも二人で暮らすには家賃が高かったから」

昭江「だったら……、だったら私と暮らせばいいじゃない……」

唯依、何かを察した顔。

昭江「私は高知で一人なのに、あんたはこん

なわけのわからない人たちと暮らして！」

大雅、自分を指さす。

瞳、そっとその手を降ろさせる。

昭江「意味がわからない、気持ち悪い！」

唯依「（荒げて）お母さん！」

唯依の声に慄く昭江。

唯依「帰って、今すぐ、帰って！」

悟「唯依さん……！」

唯依「お母さんと話すことは何もない。お願

いだから帰って」

昭江「唯依……」

唯依「（涙声で）帰って！」

暗転。ドアの閉まる音。

○同・リビング（夕）

玄関から真鍋を見送っている大雅の声。

大雅の声「ごめん、また改めて紹介する」

真鍋の声「うん」

ソファ―にぐったり座っている唯依、

悟、瞳。揃って深い溜息。

戻って来る大雅、ぐったりしている唯依たちを見て溜息。

あ！ と手を叩く大雅。

大雅「カヌレ作ってあったんだ、食べる？」
首を傾げながら体を起こす唯依。

○同・ダイニング（夕）

カヌレを食べている唯依たち。

悟「大雅くん、お菓子までお手のものとは」

唯依「これ、ほうじ茶味ですか？」

大雅「そう、よくわかったね。あっ、そうだ」

大雅、キッチンに向かい、棚からウイスキーボトルを取り出して見せる。

大雅「これ、開けてみる？ 二十年もの」

歓声をあげる唯依と瞳。

悟「ぼ、僕は水割りで……」

× × ×

ウイスキーを飲み、感嘆の声をあげる
一同。

唯依「おいしーい」

大雅「二十年あれば変わるものもあるけど、
変わらないものもあるよね」

瞳「ところで、何でカヌレ？」

大雅「この間メレンゲ作ったじゃん」

悟「あのぼりぼり食べてたやつ」

唯依「メレンゲってぼりぼり食べるもの？」

大雅「そしたら卵黄が余ったから」

唯依「ほうじ茶味なのは？」

大雅「それも余ってた日本茶。炒ったらほう
じ茶になるんだね」

瞳「惜しみなく食材を使うよね、そういうと
ころ尊敬する」

唯依「余り物の有効活用。私たちみたい」

悟「え？」

唯依「子供の作れない、余り物夫婦。ごめん、
ただの皮肉」

悟「でも美味しいよ」

瞳「余り物、って、余っていると決めた人の
都合だよ」

唯依「うん……、そうだね」

カヌレを食べ続ける唯依。

○同・リビング（夜）

ソファで寝てしまっている悟、飲みかけの水割りがテーブルにある。

唯依、瞳、大雅、ウイスキー片手に座って話している。

唯依「改めてごめんなさい、母のこと」

瞳「お母さんは、唯依ちゃんたちと一緒に暮らしたかったんだねえ」

唯依「父が亡くなって高知で一人だし」

瞳「私はね、唯依ちゃんも悟くんも、家族のようになっている」

唯依「うん、ありがとう」

瞳「今回のようなことは、まあ、慣れてるっちゃ慣れてるんだけど。でも家族の家族から言われると、また違う衝撃だったね」

唯依「……ごめんなさい」

瞳「唯依ちゃんが謝ることじゃないし、庇ってくれたのは嬉しい。でもきつとこれが大

半の現実」

大雅「色々思い出しちゃうね」

瞳「大乱闘になっちゃったやつ？」

唯依、苦笑する大雅を見る。

○（回想）病院・病室

ベッドに横たわっている大雅（31）。

足にギブス、頭に包帯、頬にも絆創膏。

傍に成瀬篤志（65）、亜由子（58）。

大雅の声「昔バイクで事故ったことがあって」

息を切らして病室に入ってくる雨宮

（29）、涙目で大雅に抱きつき、頬に

キスする。驚く成瀬一家。

大雅の声「家族には誰にも言っていなかったか

ら。いやー、滅茶苦茶になったねえ」

雨宮を殴る篤志。

篤志を止めようとしている亜由子。

ベッドの上でげんなりしている大雅。

○（回想）成瀬家・リビング

普段着の大雅（33）と瞳（32）、篤志、
亜由子と対峙している。

大雅の声「瞳ちゃんを紹介した時もさ」

亜由子「（涙目）良かったわ、ちゃんとした
人見つけられたじゃない」

篤志「とんだ気の迷いだっただ。いやいい、
気が付けたなら。これからちゃんとすれば」
ついに泣き出す亜由子。

瞳と目を見合わせる大雅、頭をかき、
話し始める。

大雅「元々ちゃんと生きてるし、俺がゲイな
のも変わらないよ」

篤志「は？」

瞳「私もそれを理解した上で結婚します」

亜由子「どういうことですか？」

啞然としている篤志と亜由子。

○元のシェアハウス・リビング（夜）

瞳、深い溜息。

瞳「……見事絶縁を言い渡される場に立ち会

いました」

大雅「やっぱり離れるしなくなっちゃったんだよね。でも諦めも肝心かな」

唯依「諦め……」

大雅、深い溜息をつく。

大雅「それが正しいと思って何十年も生きてきた人だから、否定するのも可哀想だよね」

唯依「……」

大雅「傷つけてしまうなら、離れておいた方が優しいかなって」

瞳「ちょっと虚しいけどね」

唯依たちを背に横たわっている悟、そっと瞼を開け、硬い表情。

唯依、やるせない顔。

○同・庭（夜）

唯依、ベンチに座り夜空を眺めている。

悟、あくびをしながらやってくる。

唯依「大丈夫？」

悟「うん、やっぱりウイスキーは回るね」

悟、唯依の隣に座る。

悟「お義母さんから何か連絡あった？」

唯依「ううん、頑なな人だから。どうしよう

か一人で考えてるのかもしれない」

悟「僕はね……、バレて良かったかなあ、つて思ってる。ちよつと楽になったよ」

唯依「そっか、いいな。私は全然吹っ切れてない、まだ不安。この先母とどうなるか」

悟「まあ、肝心の僕たちのことは、まだ言っていないしね」

悟、唯依の手を握る。

悟「なるようにしかならないよ。それで僕たちはどうにかなることは、きつとない」

唯依「でも、お母さんとは……？」

唯依、俯き、悟の手を強く握る。

○アライブ本社・廊下

隅で電話をかけている唯依。

応答なし、画面には「お母さん」の名。

唯依「出ない……何してるんだろう」

唯依、深く溜息。

○シェアハウス・外（夕）

昭江がポストの前に立っている。

隣の家から充子が現れる。

昭江、充子に気付き、近付く。

昭江「こんにちはー」

× × ×

帰って来る唯依、家の前で話している

昭江と充子に気付き、驚く。

唯依「えっ…お母さん、何してるの？」

昭江「あらお帰りなさい、お隣の東野さん、

ご挨拶したらお話盛り上がっちゃって」

唯依「話？」

充子「奇妙な人たち、とは思っていましたがけ

ど、そういう人たちとですか…」

昭江「そうなんですよ、そんな変な共同生活、

やめなさいって直接言いに来たんです」

唯依「は？ 何の話をしているの？」

昭江「お隣さんにちゃんと話をしていないな

んて、失礼でしょう。」

唯依「それはプライバシーよ！」

昭江「何言ってるの、お隣に得体の知れない人がいるだなんて、不安じゃない」

充子、昭江の隣で頷いている。

瞳「特に聞かれなかったので、お答えしなかっただけです」

唯依の後ろから瞳が現れる。

瞳「家賃折半の為に共同生活しています。それ以上のご説明、必要でしたか？ お聞きになりたいのでしたら説明いたします」

わざわざ聞きたくはなさそうな充子。

昭江「唯依があんたたちの影響を受けて、子供も作れなかったらどうするの。」

唯依「はあ。」

瞳「どうしても私たちがいると子供が作れなくなるんです？ 性生活は不干涉です」

唯依、ぎくっとした顔をする。

(不感症と不干涉を勘違い)

瞳「(小声で唯依に)おっと、違う違う、そ

「っちじゃない」

昭江「こんな道端で、性……生活とか、デリカシーがない！」

瞳「子供を作る話と何が違うんでしょう？」

前のめりになる瞳。後ずさる昭江。

瞳「私たちは、自らの状況を熟慮した上で、この生活を選びました。誰にも迷惑をかけるつもりはありません。実際どうですか？」

瞳、充子を見る。

瞳「ゴミ出しなどルールは守っています。町内会の参加は仕事の都合でお断りしましたが、会費を多めに入れております」

充子「は、はい……」

瞳「他にももし不足があるなら、遠慮なくおっしゃって下さい」

充子、弱々しく「はい」と返事する。

瞳「ただありのまま生きているだけの人間を指差して、気持ち悪いと平気で言うことが、人として信じがたく思います」

唯依「ひ、瞳さん、そこまでにしよう？」

唯依に服の裾を引かれ、溜息をつく瞳。
昭江、不機嫌な顔でその場を後にする。
充子、気まずそうに家へ戻る。

唯依「瞳さん、ごめん」

瞳「唯依ちゃんが悪いわけじゃないよ。ただ
ごめんね、やっぱりそういうのには、言
いたいこと言う生き方してきたから」

瞳、唯依の肩を叩き家に入る。

○歩道（夕）

不機嫌そうな昭恵が歩いている。

昭江「何なのあの女。唯依もあんなのに言
くるめられて……！」

昭江、立ち止まる。目線の先に弁護士
事務所の看板を見つける。

○シェアハウス・ダイニング（夜）

悟が帰って来ると、唯依が日本酒の瓶
を持って睨んでいる。

悟「どうしたの？」

唯依「お母さんからお土産貰ってたんだった」

悟「ちよつと気まずい？ 返す？」

唯依「いや……、いや、飲んでしまえ。だ
って置いてったんだもん」

唯依、封緘を剥がす。

悟（笑い）そういう潔いところこそ、唯依

さんらしいと思うよ」

唯依、そう？ と満更でもない笑みを
浮かべる。

悟「日本酒に合うご飯、何だろう。これと
か？」

悟、冷蔵庫から、瓶詰めの鰹の酒盗を
取り出す。

唯依「それだけじゃなあ……」

唯依、冷蔵庫を覗き、冷凍庫を開ける。

あっ……と、指差す。

× × ×

瞳がやってくる。匂いを嗅ぐ。

瞳「何だこの独特な香りは」

唯依「ちよつど出来たところ、味は保証しな

いけど、どう？」

唯依、オーブンからピザを取り出す。

アンチョビの要領で酒盗を使ったチー

ズピザ。

× × ×

大雅も交え、テーブルを囲む唯依たち

が日本酒を飲んでいる。

大雅「酒盗でピザ、その発想はなかったね。

美味しいよ、お酒にも合う」

唯依「前に地元の居酒屋で食べたことがあつて、良かった変な味にならなくて」

悟「塩気が効いてていいね。飲み過ぎそう」

悟、大きなグラスの水を飲む。

瞳「流石高知のお酒、美味しいけど強い！」

唯依「そうそう、これを飲んだら、他の日

本酒が全部弱く思えちゃう」

瞳「飲んでると故郷を思い出す？」

唯依「うん、まあ、今日は余計に」

深い溜息をつく唯依。

唯依「母も高齢出産で苦労してたから、あん

まり責められなくて。……そして私も期待に
応えられなかった」

瞳「何で自分が受けた苦しみを、子にもさせ
ちゃうのかなあ……」

大雅「一人で抱えたくないからじゃない？」

瞳「なるほど」

唯依「だからって、人のことを間違いだとか、
気持ち悪いとか言うのは、絶対違う」。

唯依、グラスをテーブルに置く。

唯依「普通に生きているだけなのに」

大雅「普通かあ、普通って何だろうね」

瞳「世の中、もっとクレイジーでひどい奴、
たくさんいるよ？」

悟「知らないから、怖いんじゃないかな」

悟、唯依のグラスに酒を注ぐ。

悟「僕は体のこと別に認めていいんだって、
唯依さんのおかげで知った。だから今普通
に生きてる」

唯依、皿に残っているピザを見る。

悟「この酒盗のピザだって、食べてみないと

美味しいことはわからなかったよ」

唯依、じっとピザを見つめ、食べる。

○路上（夕）

会社帰りの唯依、スマホが震える。

取り出して見ると昭江の名前。

唯依、応答する。

唯依「もしもし」

昭江の声「私、考えたの。あの二人を訴える」

唯依「はあああ」

唯依立ち止まる。

周囲の人、唯依の声に驚き注目する。

昭江の声「弁護士の先生と話してるから」

唯依「ちよっと、待ってお母さん」

切れる電話。

呆然とスマホを見つめる唯依。

○シェアハウス・リビング（夜）

唯依と悟、瞳と大雅、それぞれ隣同士でソファーに座っている。

瞳「母上大胆ー。大丈夫、勝てるから」

唯依「待って、そうじゃなくて、裁判沙汰に
することじゃない！」

瞳「和解も検討するよ？」

唯依「いや、だから、そうじゃなくて」

大雅「いっそ、お母さんのやりたいようにや
らせてあげたら？」

唯依「そんな簡単に言わないでよ……」

瞳「頭でわからない人は、身をもって知った
方がいいと思う」

悟「それはちよつと厳し過ぎるのでは？」

瞳「私にだって、守るべき自我やプライドが
ある。唯依ちゃんが傷つくのは本意じゃな
いけど、譲れない」

唯依、口を噤む。

○同・庭（夜）

ベンチに座っている唯依と悟。

唯依「……ここでの生活、もう無理なのかも」

悟「え……」

唯依「お母さん引き下がると思えないし」

悟「もしかしたらただの勢いかもしれないよ。
とにかくは話し合おう」

唯依、深い溜息。

唯依「普通にセックス出来て、子供作れる夫婦だったならこんなことには……」

悟「ならなかったけど。そもそも僕たち結婚しなかったし、この暮らしもなかった」

唯依「……そうだった」

悟、夜空を見上げる。

悟「……僕たちの悩みなんて、地球上のほんの一握りのことなのに、家族が喧嘩する理由にはしたくない」

唯依「うん……」

唯依、悟の肩に寄りかかる。

唯依「産めなくたって、育てることは出来るのになあ」

悟「……そういうのもありかあ」

唯依、おや？ と悟の顔を見上げる。

○同・ダイニング（夜）

背筋を正して座る唯依。隣に悟、向かいに瞳と大雅。

唯依「母に、真っ向勝負を挑む決意をいたしました」

瞳「おおー」

瞳と大雅、小さく拍手する。

唯依「立ち向かう前に、これからのことを話しておきたいです」

瞳「お伺いしましょう」

背筋を正す瞳。前のめりになる唯依。

○同・庭（日替わり）

バーベキューのセットが準備されている、近くに藁の束。

悟、鯉の柵とスマホを見合わせている。

悟「普通に焼けばいいのかな……？」

大雅、鉄串を持って笑み。

大雅「いいね、面白そうー」

昭江がやってくる。悟たちの様子を怪

訝そうに見ている。

悟「お義母さん、いらっしやい」

昭江「……どうも」

玄関から唯依と瞳が出てくる。

瞳は大雅の元へ。唯依、昭江の元へ向かう。

昭江「これから真面目な話をするのに、この人たちは気楽なものね」

唯依「ううん、私たちもこっち」

昭江「は？」

唯依「お母さんに会ったら、藁焼き食べたくなつたの」

啞然としている昭江。唯依、庭に入る。

唯依「大丈夫、準備は皆手伝ってくれるから」

昭江、唯依の向かいに立ち対峙する。

昭江「今日、弁護士の先生に話して来た。娘に取り入って、夫婦仲を邪魔している、マインドコントロールをされてるって……」

唯依「（遮り）訴えなければ訴えればいい」

昭江「（やや驚き）えっ」

唯依「訴えればいいけれど、それはお母さん自身の為であって、私の為じゃないよ」

昭江「何を言ってるの……！」

悟、唯依たちを気にしつつ炭起こしを
している。

唯依「お母さん、私ね、子供を作るのかいつも聞かれるの、辛くて仕方なかった」

昭江「そんな、どうして」

唯依「でもそれ、お母さんだってそうだったんじゃない？」

息を呑む昭江。炭起こしを手伝う大雅。

唯依「だから本当はお母さんに気持ちわかって欲しかったのに、話せなかった」

昭江「どういうこと、何の話？」

唯依、息を吸い込む。

唯依「私、不感症なの」

昭江「は？」

唯依「セックス出来ないし、しかも子供も作れそうにないって医者に言われた、……だから子供は諦めて！」

昭江、口をポカンと開け愕然。

犬の散歩する充子が近くを通り、何事かと覗く。

瞳がそっと謝り人払いする。

昭江、悟を見る。立ち上がる悟。

昭江「あなた、知ってて結婚したの？」

悟「知ってましたし、実は僕も勃起障害でセックス出来ないんです、すみません」

頭を下げる悟。

昭江「はあ??? ちょっと、そんな大事なこと何で今まで黙って!!!」

唯依「理解して貰えないと思ってたから」

昭江「それは!!!」

唯依「でも私も悟くんも、この体を受け入れて生きていくことを決めたの」

昭江「どうしてそんな簡単に諦めるの? 子供が作れなかったら、夫婦である意味なんてないじゃない?」

唯依に詰め寄る昭江。

唯依「夫婦は子供を作る為だけなの? 作れ

なかったらまともな人じゃないの？」

昭江「そういうわけじゃ……」

唯依「私たちは私たちで出来ることを考えようとしてる」

唯依、瞳を見る。

唯依「瞳さんの会社はね、マイノリティな人
たちを支援しようとして動いている」

瞳、鰹に鉄串を刺そうとしながら唯依
たちを見る。

唯依「同性カップルと親のいない子供たちを
繋いであげたり、シングルで仕事と両立が
大変な人たちを助けようとしている」

昭江「……」

唯依「凄く素晴らしいことだと思う」

瞳、誇らしげに微笑む。

唯依「私も今、子供服のビジネスをしてる。

子供いなくせにって言われることもある
けど、それでも私は続けたい」

大雅、炭に藁をかぶせ火がつく。唯依
をチラッと見る。

大雅「いいねえー」

唯依「子供を産むだけじゃなくて、親や子を支える人だって必要。それにはどういう人間かは関係ないと思う」

悟、唯依の顔を見る。

唯依「寧ろ、私たちだからこそ出来ることがあるし、考えたい。悟くんも、ここにいる皆はそれを肯定してくれた」

鯉の薫焼きを作り始める悟たち。

唯依「今のままでも、私たちは生きてるから。欠けているものがあっても受け入れたい。それをただ認めて欲しいだけなの」

唯依、じっと昭江を見る。

唯依「そうじゃなきゃ、まるで自分の産んだ娘が、人としてまともじゃないと、お母さんは自分を追い詰めてしまいたいそうで」

昭江、ハツとする。

唯依「私は、お母さんにそんなことで苦しんで欲しくない。ちゃんと幸せに生きていけることを知って欲しい」

庭に煙が立ち込める。

目を瞬かせる昭江。

昭江「もう、何でこんなところで話をするの！」

瞳「おお、ついに突っ込んだ」

唯依「お母さん、実は鰹嫌いだった？　いつも嫌そうに食べてた」

悟「え、そんなんです？」

大雅「肉持ってくる？」

瞳「いや、そうじゃない、多分そうじゃない」

瞳、呆れて首を振る。

昭江「嫌だったわよ……家の考えを押し付けられてるようで」

唯依「もう、そういうの気にせず、食べられないかな。もしかしたら美味しいかも」

悟、紙皿で鰹のたたきを二つ持つてくる。受け取る唯依。

唯依「私は、苦勞して産んでくれたのを心から感謝してる。それで、十分じゃない？」

昭江、目を瞬かせ涙。唯依から皿を受

け取り、一口食べる。

昭江「全然、本場の味と違う」

悟「ですよ。今度、食べに行きます」

昭江、もう一口食べる。

藁焼きを作っている瞳と大雅、唯依たちを見て笑顔。

唯依も食べ、笑顔で悟に目配せする。

○同・ダイニング（夜）

コーヒーを飲んでいる唯依たち。

瞳「煙一杯立つのはやめた方がいいって、お

隣さんに言われちゃった」

唯依「（苦笑）明日、謝りに行っておきます」

悟「僕も一緒に行くよ」

瞳「さて、お母さんはどう出るかな？」

唯依「鰹だけ食べて帰ったけど、どうだろう」

大雅「まあ、なるようになるしかないよ」

唯依「大雅さんが言うのと重みがあります」

大雅「だって、結局自分の人生の責任を取れるのは自分しかないじゃない。理解の難

しい人をわざわざ巻き込んでもね」

大雅、コーヒを飲み、息を吐く。

大雅「だからこそ、自分を理解してくれた人は大事にしようって思う。それは、恋愛とかそういうのは別のこと」

悟「恋愛なんて所詮奇跡の巡り合わせ。心と体も繋がれる人なんて、その中でどのくらいいるのかな」

瞳「唯ちゃんと悟くんの出会いは、相当奇跡的じゃない？ やったね」

唯依「……うん」

唯依、ほのかに笑って頷く。

○羽田空港・カフェ

向かい合わせに座っている唯依と昭江。

昭江「正直、私には理解が難しい。でも、訴えたところで何も良くならないことならわかったわ」

唯依「うん、……ありがとう」

昭江「あなたたちが悪いことをしているのか

といえ、違うとしか言いようがなかった」

唯依「それだけわかってくれれば、今は十分」

昭江「老後のことは、もう少し高知でゆっくり考える」

唯依「今度、休みが取れたら、悟くんと一緒に行く。いずれ、あの二人も一緒に連れて行けたら行きたい」

昭江「……そう、考えておくわ」

唯依、ホツとした顔でコーヒーを飲む。

○同・展望台

飛び立つ飛行機。

見送る唯依、すっきりした表情。

○シェアハウス・唯依たちの寝室（夜）

枕元のランプだけをつけて、ベッドで

横になっている唯依と悟。

唯依「お母さん、訴えないって」

悟「そっか、ちゃんと話せて良かった」

唯依「ありがとう、背中押してくれて。一人

で考えてたらこうはならなかったもの」

横向きに寝て、見つめ合う唯依と悟。

唯依、照れ臭そうに笑い、キスを求める顔。

顔を寄せていく悟（触れ合わない）。

○同・リビング

日光の差し込むリビング。

T「一年後」

隅にベビーベッドが置かれている。

ベッドにいる新生児の赤子。

唯依（29）の手が伸び、赤子を抱き上げてあやし始める。

悟（27）、哺乳瓶を持ってやってくる。

唯依 N「さて、この赤ちゃんは私たちの子供
……ではない」

○同・前から庭

伊月（32）、唯依から赤子を受け取る。

伊月「今日もありがとう、助かった」

× × ×

手を振り、車を見送る唯依と瞳（36）。

瞳「伊月のように、レズでも男と結婚して、

結局離婚しちゃった子、結構いるんだ」

唯依「伊月さんは自分を偽らない道を選んだ」

瞳「うん、でもやっぱりシングルは大変だよ」

家に戻って行く唯依、瞳。

唯依 N 「瞳さんは本格的にマイノリティな人
たちを支援する活動を始めた。本業はリモ
ートワークにして、子供の一時預かりをし
ている。私も手伝える時は手伝っている」

庭で大雅（37）と翼（6）がボール遊
びしている。

唯依 N 「親元にいられない子供たちと遊ぶこ
とも、支援の一つだ」

大雅、翼の投げるボールを受け止める。

大雅「すげえ！ 豪速球！」

翼「俺に惚れるなよー！」

大雅「俺にはちゃんといえるから大丈夫ー」

大雅、近くでバーベキューの準備を始

めている真鍋を見る。

唯依 N 「大雅さんは彼とそこそこ上手くやっているらしい。ちなみに瞳さんとも」

瞳、真鍋の持っている袋を見て叫ぶ。

瞳 「悠くん、炭そつちじゃないの、使いかけが残ってるからー！」

真鍋 「それ先に言ってー！」

瞳 「察しろー！」

笑い合っている瞳と真鍋。

充子が町内会の回覧板を持ってやって来る。駆け寄る悟。

充子 「酒巻さんが参加してから、色々助かってるわ」

笑顔の悟と充子。

唯依 N 「こっちも最近何だかんだで上手いっている」

× × ×

バーベキューを食べている一同。

悟が翼に肉を取り分けている。

その様子を見ている唯依と瞳。

瞳「私、子供欲しいかも。科学の力、なんとかなんないかなあ」

唯依「いいんじゃない？」

瞳「あー、その前に私も嫁が欲しい！」

笑い合う唯依と瞳。

食べながら悟に質問する翼。

翼「何で悟たちには子供がいないの？」

悟「うーん、説明するのが難しいけれど、でも翼さんと遊ぶことが出来ているよ」

翼、意味がわからず首を傾げる。

× × ×

唯依と悟、庭の隅に座り話している。

唯依「今度ね、シングル向けの企画を担当することになった」

悟「そんな企画が上がったんだ」

唯依「（楽しそうに）そう、伊月さんも協力してくれるって、色々出来るかもしれない」

悟「いいね、僕も何か出来ないか考えてみる」

笑い合っている唯依と悟。

唯依N「私は家族の愛情を確かに感じている。

一緒にいてお互いを支えたいと思える感情を、愛情と呼ぶに何というのだろう」

× × ×

バーベキューの煙を見て唯依が呟く。

唯依「やっぱり薫焼き食べたいなあ」

悟「煙問題どうしよう？」

瞳「やっぱり、現地に行くしかないね」

大雅「いいねー」

テーブルの上にはバーベキュー食材だけではなくバラエティーある食卓。

皆、好きなように食べて飲んでいる。

唯依 N「私たちは、いや誰しも、何か足りないものがあつたつて、それでも生きている。ささやかな幸福を繰り返しながら」

唯依は日本酒、悟はビール、瞳は赤ワイン、大雅はハイボールを飲んでいる。瞳、大雅と乾杯して笑顔。

唯依、悟と乾杯して笑顔。

唯依 N「私たちはこうして普通に生きている」

(了)